

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡



Vol. 17

anthology 合 歡 Vol.17

目 次

初冬……………	長尾京子……………	24
兎群る……………	鳥越 禁……………	22
夏の一日一日……………	富阪宏己……………	20
夏……………	高城登代……………	18
紅葉の街……………	角南房子……………	16
凍る……………	桜本滋子……………	14
孫俳句に挑戦……………	尾形松子……………	12
唐辛子……………	梅田光憲……………	10
色……………	植田桂之……………	8
里山……………	井上悦男……………	6
芯……………	石井宏幸……………	4

旅寝……………	信里由美子……………	26
盆の夜……………	蓮岡健美……………	28
返り花……………	真木好子……………	30
寒鴉……………	三宅 進……………	32
冬満月……………	與田武彦……………	34
朝……………	米元ひとみ……………	36
竜の玉……………	渡辺牛二……………	38
編集後記……………	渡辺牛二……………	40

苾

石井宏幸

こんこんと影を組み上げ日の泉
たましひの遅るるやうに追ふ草矢
炎天の苾とし天守立ち上がる
忘れ得ぬ人を語れば水澄める

この秋から日本伝統俳句協会中国支部岡山県部会の事務局長を務めることになった。会計も併せて務めるので、こまごまとしたことがいろいろある。

この私にでも出来ることがあれば、何かお役に立てることがあればとお引き受けしたが、俳句だけを作り、楽しんで来たこれまでとは少しペースのようなものが違う。

しかし、俳句の楽しみそのものが変わるわけではないので、割り切って俳句に向き合うことにしたら、少しだけ素

底紅に真昼の苾の一つつつ
秋風のために村塾開けてあり
広芝の空を載せゆく秋日傘
秋深しただすれ違ふ人の背も
四方よりの風に繋ぎ目鉦叩
蔓引けば空が音立て通草棚

直な句も出来ているのではと、この頃思うことがある。

里山

井上悦男

見る木の実遊ぶ木の実と食む木の実
木の根には木の根の自由木の实落つ
取るなてふ云はるる木の実拾ひけり
四つ這ひに拾ふ木の実に遊ばるる

落ちてより実の新しき栗拾ふ
眠る子の右手に握る木の実かな
小包の手触り大ききさうな栗
二人居の自由不自由栗の飯
古里の訛りの中に吊るす柿
通草の実久しき友の家を訪ふ

色

植田桂之

捨て猫の集ひてをりぬ木下闇
夏草の生ひ茂るまま忠魂碑
大賀蓮太古の色に染まりけり
噴水に濡れて飛び散る子らの声

京料理朱椀に沈む鱧の花
健やかな二人の暮し秋刀魚焼く
千号の空のキャンバス秋夕焼
秋の夜や灯す明かりの和紙の色
冬鳥の点となりたる梢かな
御社の注連縄青く匂ひけり

唐辛子

梅田光憲

大空を吊りし手応へ風の糸
お遍路の頭陀袋よりハーモニカ
紙風船つくやつくづく紙の音
滴りの焦らす合間でありにけり

今回は花鳥風月ではなく、生活感のあるもの、又自分の気持が少しでも詠めた句を、(二十八年度の作句の中から)十句を選び表題「唐辛子」として発表させて頂きます。

二十九年度は、又新しい気持ちで、俳句に取組みたいと思います。

去年は腎臓が悪い事も判明し大変でしたが、妻の作る腎臓食のおかげで透析だけは免れ、ホッとしているところです。

なんとと言っても、健康が一

炎 天へ急勾配の男坂

時の日の時の過不足それぞれに

雲眺むる吾齢とも愁思とも

七十路にありしはにかみ赤い羽根

我を張るも曲るも一日唐辛子

朦朧として数へ日の飲み屋街

番です。ね。
元気であれば幸福はついて来るもの。
健康で良い年である事を願うのみです。

幸福は巡り来るもの宝船

光憲

孫俳句に挑戦

尾形松子

ハッピーバースデーと孫より紅薔薇
ハンモック母と双子の笑顔かな
摘草や双子のひとり土手ころげ
咳の子のもう一回と指を立て

「孫俳句は歓迎できない。」
と言われる句会もあると聞いた
ことがありますが、私の尊
敬してやまない女性俳人の先
生は、「孫の思い出として、
今しか詠めない句をどんどん
詠みなさい。」と提言してく
ださった。
成長の記録にもなるし、どん
どんも出来ないけれど、たま
に孫たちと会えた時には、か
くれんぼや縄跳び遊びに興
じ、作句どころではありませ
んでした。
後から思い起し、なんとか十
句選んでみました。

縄跳びが百回できた冬休み
木登りをばあばに見せて柿日和
入学式子を見る母の真顔かな
乗初や姫路駅にて孫を待つ
初写真城をバックにはいピース
紫陽花やどの句がいい？と三年生

出産当時は、慣れない手伝い
だけで…。今に思えば、しつ
かりメモでも残しておけばよ
かったと残念に思います。
早くから準備しておけば良
かったのに、年の瀬も押し迫
り、出句がぎりぎりになりま
した。
今回は、バスしようかと考えま
したが、なんとか頑張りました。

凍る

桜本滋子

凍る池風の磨いてをりにけり
滝凍てて龍の髭かと思ひけり
凍りつく柄杓の重さ汲めばなほ
凍る池幾何学模様つながりぬ

いぬくぐりてふ抜け道の関所凍て
凍てし道牛神様のまだ遠く
島凍り海猫の声ついてくる
モノクロの朝の電飾凍つもの
伸びきつて芭蕉幹ごと凍ててをり
凍蝶の力ためぬる静寂かな

紅葉の街

角南房子

荒梅雨の小流れあふれゆく速さ

そよ風が一日の客や夏座敷

戒名はちゃん付けで呼び門火焚く

甘き香の月下美人の開く闇

宿場町過ぎて始まる稲の花

彼方へと光る帰燕の空となり

一匹の孤独を鳴いて鉦叩

金銀の風の眩しき鳥威

新米のどさりと届く一袋

街路樹の紅葉の街に待ち合はす

三十年ほど前、瀬戸大橋の開通に伴って片田舎の町が整備され、洗練された街並や街路樹の並木路ができた。その通りは児島の塩田王の名前にちなんで武左衛門通りと名付けられた。

街路樹は新緑の頃から木洩れ日の風に揺れる爽やかな緑になる。

そして秋には紅葉へと移り、紅葉が散り始めた頃には黒い実がなる。

乾いてその黒い果皮がとれると南京櫛と言う名の通りの真っ白な艶やかな実の蠟と

なっている。

四季を通して楽しませてくれる並木路である。

夏

高城登代

小太りの猫駆けて行く子供の日
羅の袖裾揺らしお師匠さん
ズボン捲り押へ掴むや大鯰
震ひつつ衣脱ぐ蛇の小さき事

ブラツクの缶コーヒー手に暑気払ひ
雲の峰崩れ住む町濡らしけり
滝しぶき掛かりて地藏乾かざり
遥邨の光で画きし納涼船
古民家の黒柿格子夏の雨
老二人極暑の中に鎮座して

夏の一日一日

富阪宏己

犬と娘と夏が走つて来たりけり
炎天を真一文字に飛機航ける
無造作に活けて夏咲く花らしく
天然の味と色なり夏料理

水の上を渡る風あり涼みけり
空青く万緑静かなりにけり
片陰の瘦せさらばへて正午なり
夏草の香の殺気立つ午後なりき
油蟬鳴きゐて過疎を深めをり
暑くともすでに暮るるを急ぎをり

みなさんは気分を記憶しているだろうか。わたしは七十年近く前の、ある日のある種の気分を記憶している。正月の気分。節分の気分。夏祭りの気分。そして、ある夏の日の気分を。

俳句づくりは瞞目で、何かに目をつけ、良く見ることだ。問題は、何に目をつけるかだが。たとえば、尋常でない事とか。しかし、そうそう尋常でない事に出合いはしない。だから、何でもかんでも、目についた事を句にする。駄作が山ほど溜まるのだが、そ

れぞれの句に詠んだときの気分は捉えている。その気分が七十年近く前に体験した気分とつながっているから面白い。

今日の十句もそうだ。七十年近く前に体験した、七十年近く前の気分と重なっている。

兎群る

鳥越 禁

昔毒ガスの島てふ兎群る

落葉敷く羅漢堂への磴険し

釈迦菩薩十六羅漢洞小春

山里に溶け込む案山子百余名

絹掛の滝を背に燃ゆ冬紅葉

悠久の刻めくるめく冬の洞

端正や剪定終ゆる冬木立

禅堂の凜と静もる小春かな

虚子の塔訪ふ横川冬紅葉

椿堂包む木の間の冬日かな

初冬

長尾京子

晩秋や路地吹く風のカラカラと
重ねし日釣瓶落しの瀬戸の海
晩秋や稜線隠す朝の靄
流鏑馬の騎手の背中や秋澄めり

結願へ歩き繋ぎて小春風
高々と冬満月や松の影
東へと一目散の冬の雲
嬰の如身を委ねたる芒原
閉ざされし深山の里も冬座敷
旅先は静かなりけり十二月

旅寝

信里由美子

月今宵下界に現れし影の国
遠き日の戻り来るかに十三夜
行くほどに過去へ過去へと十三夜
霧深きカルストの景異界めく

霧深し過去も未来も遠ざかる
旅寝する風の向かうを夜鴨啼く
湖あかり障子あかりに目覚めをり
飛び翔てば空にもありし鴨の陣
水の裏水の表を鴨自在
現れし鳩煌めくいのち嘴に持つ

盆の夜

蓮岡健美

青々と青田の里や水走る
整然と莖まつすぐに鶏頭花
盆の夜をコンビナートの火の猛る
大らかな空が友達吾亦紅

石路の花思ひ浮かぶは母のこと
一歩ずつ足跡沈め冬の浜
立冬の街騒に見る天守閣
椎櫨檜の落ち葉の嵩を踏む
朝靄の水面を鴨のかしましく
はらはらと落葉しぐれの景の中

ともすると、硬くなりがち
な脳と体を如何に柔軟にさせ
ておくか、大きな課題となっ
ております。
難しい事はさて置いて、移
ろう季節を素直な心で、見た
まま表現出来たらいいなあ、
と思っております。

返り花

真木好子

時折は猫ゐる出窓ヒヤシンス
初めての町の看板風青し
ひさびさの連れ立ちうれし風薫る
黙礼で過ぐる僧房まゆみ咲く

石文になぞる詩歌や新樹光
吊橋に声の揺れたる滝見かな
秋冷や握手せし手のほつこりと
亡き人の通ひし坂や冬紅葉
階段は不意のりハビリ風冴ゆる
本丸へ誘ふ風や返り花

寒鴉

三宅 進

小春日につい誘はれてぶらぶらと
住みついて何を企む寒鴉
お出かけの衣装も少し春らしく
天空に鳴き声残し落雲雀
白壁に描いたやうに青蛙
降り続く雨そのままに梅雨となる
夏至来る夜のひととき大切に
牛蛙鳴き声すれど姿見ず
秋に入り帆数も増えし瀬戸の海
庭すでにあちこち虫の演奏会

時の流れ

與田武彦

母送り父は残りし秋の蟬

老親の好きな食べ物さがす秋

鱗雲大空いつぱい光るかな

十月の空高く飛ぶとんびかな

猪やお地藏倒し知らぬ顔

角島や冬の灯台白き波

冬の海昔電車の線路かな

銀杏ちる季節が移り時を知る

十二月痛みが判る医者捜し

父が逝き母に呼ばれし師走かな

今年は何の縁について考えさせられる年になりました。師走に義理の父が亡くなり、その父との縁で妻と結ばれ、家族を持ち、この時代を生きてきました。

朝

米元ひとみ

兄ちゃんになること知らず水遊び
とことこと歩ききよとんと昼寝覚
びよんと子が出でて入りて白日傘
新涼のいつ生まれてもよきおなか

兄よりも大き産声初月夜
爽やかに産後の朝を迎へけり
赤ん坊のすたとんと眠る虫の夜
赤ん坊の日に日に太る豊の秋
見え初めし子が拳見る小春かな
背中にも胸にも赤子冬ぬくし

昨年の春、娘が一歳四か月のやんちゃ坊主をかかえて、切迫早産という事態に陥り、出産まで半年の安静を余儀なくされた。

帰宅後も土日も子守を任せられた婿も大変だったが、早朝から日暮れまで、毎日通ったジジババ、特に、炎天下を散歩して出来たババのシミは勲章ものである。

よく持ち堪えてくれた娘とおなかの子に感謝して十句にまとめてみた。

竜の玉

渡辺牛二

杣道や風倒木に冬朝日
裸木となりゆく一樹より一葉
竹垣をこぼれ山茶花まつ盛り
冬菜畑日ごとに余白増えにけり

句会への道すがら流すのはいつも拓郎、陽水、かぐや姫と、七十年代、八十年代の曲ばかりです。
少し前になりますが、そんな道すがら、陽水の「人生が二度あれば」が流れてきました。
♪父は今年二月で六十四♪
そう、気づけば自分の歳なんです。
かつて慣れ親しんだ歌ですが、一度だって自分が六十四になった時の事なんて思ったことはありませんでした。
♪仕事に追われこの頃やつ

黄葉して街より高き銀杏の木
解体のビルの槌音暮早し
北風やコークス匂ふ街の空
完璧と思へど曇り竜の玉
川鳥の一斉に発つ鷹の影
銃身を隠して獵夫人里へ

とくゆとりが出来た♪
気づいた途端に、なんだか目頭が熱くなってしまいました。
♪湯呑に映る、自分のく顔を
じっと見ている♪
そうか、六十四ってこういう歳だったのかと・・・。
それからしばらくその曲を繰り返し繰り返し聴きながら句会へ向かいました。
車の中なのを良いことに、時々目頭を押さえながら・・・。

◆前ページに続くような話になりませんが、その後今度は六十五歳になりました。

◆早速年金の手続きのお知らせが来ました。額の記入はありませんでしたが、何はともあれこれで少しは楽になると、喜んで手続きを済ませました。

◆数日後に、今度は介護保険のお知らせが来ました。保険証と保険料支払いに関するお知らせです。

◆今度はなんだか急に歳を取ったような気分になってしまいました。単純ですね。

◆津山では六十五歳になると鶴山公園に無料で入れるようになりま
す。他にも特典はあるのでしょうか、
知っているのはこれだけです。

◆最近高齢ドライバーによる事故が多発しています。これもだんだんと
他人事ではなくなってきました。
かと言って、車がないと句会へも行
けなくなってしまうです。

◆それは困りますので、ここは早く
自動運転の車が出来ることを期待し
ながら、安全運転を心掛ける他はな
さそうです。

◆自分の事ばかり書いてしまいました
たが、皆様にも高齢ドライバーの方
あるいはそれに近い方が多いと思っ
ます。

◆どうぞ気を付けて、次号にも楽しい
句をお寄せくださいますよう、お願
い申し上げます。

◆早く暖かくなりますように。

日向ぼこ犬も私も平和主義

(牛二)

アンソロジー合歓 Vol.17

平成29年2月4日発行
発行 合歓の会
発行責任者 富阪宏己
印刷 大友出版印刷
大阪市生野区

連絡先
〒701-0304
岡山県都窪郡早島町早島 3991-144
富阪宏己方

次号締め切り
平成29年7月31日
原稿送付先
〒708-0015
岡山県津山市神戸 719-7
渡辺牛二
Email : info@nemunokai.net
Tel. : 090-8710-7067